

里山や里海だけではなく、暮らしとかかわるすべての水循環の経路を私たちのセンターでは「里川」と呼んでいます。いろいろな里川を発見しその価値を身近に感じたい！ ということで、2011年度からスタートした「里川文化塾」。「楽しみながら学ぶ『水の防災プログラム』をつくるためのワークショップ」(7月30日)と「浦安市の震災と上下水道」(9月15日)のご報告です。

今年度は、「水の郷・日野を歩く一用水路を活かしたまちづくり」(11月10日)、「船でゆく荒川—人工水路と暮らしの接点」(12月6日)が予定されています。

里川文化塾

詳細はHPで公開しています。

<http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/>

楽しみながら学ぶ『水の防災プログラム』をつくるためのワークショップ

会期：2012年7月30日(月)【第1部】9:45～12:00 / 【第2部】13:30～17:00

会場：板橋区立成増小学校(東京都板橋区)

プログラムリーダー：NPO 法人プラス・アーツ

プログラム コンシェルジュ：〈板橋区 地域コーディネートの達人〉白鳥円啓さん 成増小学校支援地域本部地域コーディネータ

プログラム コンシェルジュ：〈板橋区 防災マップの達人〉坂本東生さん 板橋区議会議員

プログラム コンシェルジュ：〈防災プログラム開発の達人〉永田宏和さん NPO 法人プラス・アーツ理事長



〈子ども向け防災プログラム〉とは、いざというときに自分の身を守るために、子どもが自分で考えるためのツールです。今回の里川文化塾では、それぞれ所属する地域で、オリジナルの「子ども向け防災プログラム」がつくれるようになることを目指しました。

防災の一番の備えは「地域を知ること」。フィールドに選んだ板橋区成増地域は武蔵野台地の北端にあたり、中小河川が台地を削った小さな流れが多くあつた地域です。しかし、それらの流れは暗渠化されて、普段は意識されていません。そこで第一部では実際にまちを歩きながら、地域に潜む課題を探りました。成増小学校から南側の〈源流コース〉を白鳥さんから北側の〈窪地コース〉を坂本さん

に案内していただき、土地の履歴や増水時のウィークポイントなどについて、確認しました。

第二部ではプログラム コンシェルジュのみなさんに、地域コーディネーター、防災マップ、防災プログラム開発の立場から発題していただき、それを受けてグループに分かれて課題抽出を行ないました。短い時間でプログラム構築まで行き着けませんでした。参加者からは、「体験的に伝える、知ることに具体的イメージやヒントを得ることができた」「子どもたちにわかりやすい提案を出すのは難しかったが、フィールドワークと合わせて今まで気づかなかったようなこと、新しい発見がたくさんあった」と、オリジナルプログラムをつくるヒントを持ち帰ってまいりました。

浦安市の震災と上下水道

会期：2012年9月15日(土) 10:30～16:00

会場：高洲公民館(千葉県浦安市)

プログラムリーダー：前川太一郎さん ライター・編集者

講師：長田克也さん 千葉県水道局 技術部 給水課 配水施設室 配水工務班 班長

講師：堀井達久さん 浦安市 都市環境部 下水道課 課長補佐

講師：藤倉一紘さん 浦安市 都市環境部 下水道課 主事

ゲスト：岡田健嗣さん 有限会社トスワーク 代表取締役

※浦安市内のマンションに居住

ゲスト：熊木幸治さん 公益社団法人 浦安青年会議所 理事長

※震災後、市内にボランティアセンターを組織



千葉県浦安市は、東日本大震災による砂地の液化現象で、市内の上下水道に大きな被害が出ました。上下水道は、約7万1400世帯の46%にあたる3万3000戸で断水。下水道は最大時1万2000戸で使えなくなり、埋立地の下水道管の長さは約120kmで、そのうち60kmが土砂で埋まったそうです。応急処置によって日常生活を取り戻していますが、東京湾岸に位置し面積の75%が埋立地という浦安市では、今後の復旧工事と液化対策には、なお時間がかかるということです。

震災直後の応急復旧では、土砂の除去など清掃作業が必要ですが、作業車両は何台も同時に入れません。ガス・上・下水道といったライフラインは同じ道路の下を走っているため、混乱が起きたそうです。各ライフラインの復旧作業の調整については、今後に大きな課題を残したといえます。また、仮設トイレ

も単に機能を満たせばいいというわけではなく、治安上の安心感やプライバシーの保護といった配慮が日を追うに従って整えられていってほしいです。

水の融通や仮設トイレの共有などを通して、ご近所づきあいが復活し、お互い気にかけるようになった、という報告もありました。震災という大きな代償を払ったことは不幸中の幸いだった、ということでした。

被害と復旧の様子をうかがいが市民の体験談を聞く中には、経験してみないとわからないこのような事柄がたくさん盛り込まれ、多くのことを教えられるました。

日本の水文化調査(2011年)でも、浦安市のことを取り上げています。

<http://www.mizu.gr.jp/chousa/theme2011.html>

■水の文化 43 号予告

特集「庄内豊穰の種」(仮)

期待の新種〈つや姫〉をはじめ、庄内の農はなぜか元気。在来作物の豊富なことも群を抜いています。その元気を育んできた秘訣を探ります。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。また、今年度から始まった〈事・場（ことば）ネットワーク〉第一弾は山梨県都留市の取り組みです。取材日記も随時、更新されています。

編集後記

◆ 水という限られた資源を守るには、高度な技術だけでなく、自分たちが身近な場所から貢献できることを再認識しました。これは水に限らず家庭ゴミなども同様で、限られた資源を使いながら守ることができるといふこと！ 今日からトライ。(宮)

◆ 普段から家で使用する水の出所と行先についてはあまり意識したことがない方も多だろう。入ってくる水もそうだが、出て行く水の行方と汚れ具合については意識してほしい。食器の油污れも紙で拭き取ってから洗えば、水質汚濁に大きな貢献ができる。(新)

◆ 私は都内の川縁で育ったが、川は堤防で囲まれ親しむ対象ではなく、日々使う水にも無頓着であった。しかし子を育てる歳となり自分が使う水の出自も知らず、その使用に無責任な生き方に疑問が出てきた。まずは台所排水に気を配ることから実行したい。(松)

◆ 暮らしの水を改めて見つめ直すと、里川概念がより浮き彫りになると痛感。今特集は広く生活者のみなさまにいつも以上にわかりやすく読みやすく意識した。身近な水に意識を向けるきっかけになれば幸いです。(ゆ)

◆ 当たり前になっていくと、有り難さや大切さがわからなくなる。今回、昨年の震災で得たはずのこの教訓を、いつの間にか失念していたことに気づいてハッとしました。これからは、常に身近なものへの関心と感謝を忘れずにいたいと思う。(原)

◆ 東京の雨水の行方や一人当たりの降水量など、数字で見せられると目から鱗だ。これだけ雨が降って、川が流れて、先人の積み重ねてきた努力があって、水が豊かな国だと錯覚していたが、決してポテンシャルが高いわけではないことを肝に銘じておきたい。(力)

◆ 毎月の水道代は光熱費の中では割安に感じます。日本は水に恵まれた国だと思っていたので小倉先生の「一人当たりの日本の水資源は決して豊かではない」というお話に驚きました。私達は地球に問借りしている立場です。できるだけ汚さず暮らしたいものです。(麻)

◆ 節電に比べて節水意識が稀薄なのは、水道代が安いから？ もし、判断基準がお金だけになっていたら恐ろしい。「なぜ、水は大切なか」と子どもに聞かれたら、ちゃんと答えられる大人になりたいものだ。根源的な問いに答えるのは難しい。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第 42 号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁断転載複製

発行日 2012年(平成24)11月

企画協力 沖大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
島谷幸宏 九州大学工学研究院教授
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

客員主幹研究員 中庭光彦 多摩大学准教授

制作 宮崎真次 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 原田朱野

編集製作 賀川一枝 編集長 小野田麻里 中野公力 賀川督明 撮影・デザイン

発行 ミツカン水の文化センター
〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中壘ビル9F
株式会社ミツカングループ本社
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局
〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506